

令和元年6月17日現在

機関番号：15501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02001

研究課題名(和文) 形而上学的接地関係の定式化に基づくメタ形而上学的論争の調停

研究課題名(英文) Conciliation of metametaphysical Debates based on formulating the notion of grounding

研究代表者

小山 虎 (Koyama, Tora)

山口大学・時間学研究所・講師(テニュアトラック)

研究者番号：80600519

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究によって、メタ形而上学における実在論的アプローチと反実在論的アプローチの間の論争を調停する具体的手法として、分析哲学の方法論を歴史的観点から再検討することで形而上学的接地関係に新たな定式化を与えるというアプローチの有効性が明らかとなった。加えて、こうした歴史的再検討により、分析哲学に対して、それ以外の諸分野(例えば、新カント派、オーストリア哲学、ポーランド哲学、アメリカ観念論、新実在論など)や他分野の歴史(心理学史、行動科学史、大学制度史など)との関係から新たな特徴づけが与えられることも明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

実在論的アプローチと反実在論的アプローチの論争という分析哲学における近年の大きな論争の一つが、単なる二つの相容れない立場の対立ではなく、歴史的背景に基づいたものとして特徴付けることが可能であるという本研究の成果は、分析哲学における最先端の研究状況を明確化するものであり、本研究成果を参照することにより、分析哲学の研究が他分野に広まる際に誤解が減少することが期待できる。また、分析哲学の歴史的再検討は、これまでは知られていなかった他分野との関連性を明らかにするものであり、現代の社会的問題に対して分析哲学が貢献する可能性を広げるものである。

研究成果の概要(英文)：By this study, it was found that as a method to conciliate the realistic and the anti-realistic approaches in metametaphysical debates, reformulating the notion of metaphysical grounding by reexamining the methodology of analytical philosophy from the historical point of view is promising. In addition, it was also found that with the historical reexaminations, a new characterization of analytic philosophy on the basis of the relationship with other fields in philosophy (e.g., Neo-Kantianism, Austro-Polish philosophy, American idealism and new realism) and the histories of other arias such as psychology, behavioral sciences, and higher education.

研究分野：分析哲学、形而上学、分析哲学史、ロボット哲学

キーワード：分析哲学 分析形而上学 分析哲学史 メタ形而上学 哲学方法論

1. 研究開始当初の背景

近年、分析哲学では方法論に対する再検討が進んでおり、特に分析形而上学では「メタ形而上学 (Metametaphysics)」という一分野が形成されている。現状のメタ形而上学での大きな理論的対立として、実在論的アプローチと反実在論的アプローチとの論争が挙げられる。実在論的アプローチとは、ある種の形而上学的実在を措定し、形而上学はその実在に基づく説明を与えるとする立場のことである。具体的には、真理メーカー (truthmaker) や存在論的優先性 (ontological priority) などを措定する立場であり、代表的な哲学者として D. M. Armstrong や K. Fine、J. Schaffer、T. Sider などが挙げられる。これに対し反実在論的アプローチとは、実在によって裏付けられるような特権的な真理を認めず、一連の基礎的な真理から認識論的に到達可能な真理のみを認めるという立場であり、代表的な哲学者として D. Chalmers や A. Thomasson などが挙げられる。後者は特に、形而上学のみならず、心の哲学や認識論も統合した総合的な枠組みを提供している。

実在論的アプローチと反実在論的アプローチの対立の深刻さが認識されるにつれ、2010年代に入ってから、両者の対立を形而上学的接地 (metaphysical grounding) 関係という新たな道具立てを導入することによって解明し、決着につなげようとする試みが広まっている。形而上学的接地関係は、実在論的アプローチの支持者が用いる真理メーカーや存在論的優先性に加え、スーパーヴィーニエンス (supervenience) やメレオロジー的構成 (mereological composition) のような形而上学や存在論において重要な役割を果たす関係一般を含む関係の総称である。形而上学的接地関係としてどのようなものが認められるのかを明らかにすることにより、実在論的アプローチが主張するように形而上学的実在を必要とするものなのか、あるいは反実在論的アプローチが主張するように認識論的な説明でも許されるのかを明らかにされると期待されている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、研究代表者がこれまでに行ってきた分析哲学の方法論に関する研究成果を形而上学的接地関係に適用することにより、現在のメタ形而上学の全体像を新たな観点から整理し、実在論的アプローチと反実在論的アプローチの対立を調停することである。具体的には、以下の二つの研究活動を主に実施した。

- (1) 形而上学的接地関係に対し、分析哲学の方法論の再検討を踏まえた定式化を与え、それと反実在論的アプローチとの親和性を調査する。
- (2) 実在論的アプローチと反実在論的アプローチの調停に関する具体的手法として歴史研究に基づくアプローチを検討する。

分析哲学はまだ100年ほどの歴史しかなく、歴史研究は最近になったようやく本格的になったばかりであるが、分析哲学の方法論が通常考えられているような単純なものではないことは近年の歴史研究により明らかになっている。一方で、そうした最新の知見を踏まえることは国際的にもメタ形而上学者の間では、ようやく進みつつあるという程度である。本研究は、上記の研究活動を行うことで、分析形而上学の枠を越え、従来の分析哲学観の見直しまで視野に入れたものである。

3. 研究の方法

本研究は個人研究であるが、研究代表者がこれまでに構築した国内外の研究者とのネットワークを積極的に活用して実施したことは強調すべき点である。研究協力者の中でも特に、メタ形而上学だけでなく分析形而上学に関しても国際的権威のひとりである米国 Rutgers 大学教授の Theodore Sider 氏と Jonathan Schaffer 氏の助言・協力を仰ぐことにより、本研究の極めて効果的な実施が可能になるだけでなく、国際的な水準の研究であることを確認しながら研究を進めていくことができた。

本研究では様々なトピックについて研究を実施したが、それが可能だったのは、国内の多くの研究者と定期的な会合を実施するという方法を採用したからである。特に研究成果の一つであるデイヴィッド・ルイスの主著『世界の複数性について』の翻訳出版に関しては、共に訳者を務めた海田大輔氏、山口尚氏、佐金武氏と定期的に進捗報告会を行うという形で実施した。

所属する大阪大学でも、長年の共同研究者である中山康雄氏のゼミに定期的に参加し、特に大学院生の雪本泰司氏から多大な協力を得ることができた。関西以外でも、鈴木生郎氏、植村玄輝氏、秋葉剛史氏、谷川卓氏、北村直彰氏、高取正大氏らと研究会を開催するなどして助言や協力を仰ぎながら研究を進めた。とりわけ Truthmaker に関する研究は、彼らとの協力によって実行が可能になった。

また、一元論に関する研究は、分析形而上学と哲学史研究の両方が必要となるため、雪本泰司氏、立花達也氏、米田翼氏、大畑浩司氏というそれぞれ専門の異なる若手研究者（大学院生）定期的に勉強会を開催することで実施した。

そして分析哲学の歴史研究に関しては、長年の共同研究者であり、大阪大学基礎工学研究科では居室を同じくしていた笠木雅史氏と密に連絡を取りながら実施した。

本研究の研究成果は主に文献調査に基づくものであるが、特に歴史研究に関しては、書籍以外に、Internet Archive (<https://archive.org>)で公開されている資料を中心に利用することで初めて研究が可能となった。

4. 研究成果

本研究によって得られた成果として、まず挙げるべきであるのは、メタ形而上学における実在論的アプローチと反実在論的アプローチの対立をいかにして調停すべきかという問題に対して、歴史研究に基づく手法が有効である見込みが明らかになったことである。すなわち、分析哲学に関する近年の歴史研究に基づき、実在論的アプローチを採用する哲学者の中で共有されている暗黙の前提と共有されていない暗黙の前提を明確化することによって、どの前提を維持し、どの前提を放棄すれば反実在論的アプローチとの一致点を見いだしうることがわかった。

従来の研究では、実在論的アプローチに共通する道具立てとして形而上学的接地関係が考えられており、形而上学的接地関係をどのようなものとして理解すべきかが焦点となっていた。しかし、K. Bennett, *Making Things Up*, Oxford University Press, 2017 や J. Wilson, “No Work for a Theory of Grounding”, *Inquiry*, 57(5-6), 535-579, 2014 などにより、形而上学的接地関係は極めて雑多であり、かつ存在論的な要素と認識論的な要素が入り混じっているため、何らかの基準を設定しない限りは、求められるような定式化が不可能であることがわかってきた。

本研究では、研究代表者のこれまでの研究成果に基づき、まずはメレオロジーと Truthmaker 理論に限定することで、形而上学的接地関係の定式化が実在論的アプローチに与える影響を検討した。その結果、デイヴィッド・ルイスが提唱した様相実在論に対しては、メレオロジーに基づく定式化を与えることで、新たにかなり決定的な反論を与えることが可能であることがわかった（この成果については、雑誌論文[2]として公表した）。また、ルイスの様相実在論以外の主張を吟味することにより、命題の「主題 (subject matter)」ないし「ついて性 (aboutness)」の概念を仮定さえすれば、Truthmaker 理論と同等の理論を通常のクワインのメタ存在論の道具立てによって与えることが可能であり、ゆえに形而上学的接地関係に関して Truthmaker 理論を除外できることがわかった（これについては、学会発表[7]で公表し、論文を投稿準備中である）。また、図書[2]は、こうした一連のルイス研究の成果である。

上記のメレオロジーに基づく定式化にとって大きな役割を果たしていたのは、J. Schaffer, “Monism: The Priority of the Whole”, *Philosophical Review*, 119(1), 31-76, 2010 で提唱された優先性一元論 (priority monism) に関する議論である。そこで優先性一元論に関して広範囲にわたる調査を行った。中でも、P. Goff (ed.), *Spinoza on Monism*, Palgrave, 2012 を集中的に検討したところ、Schaffer による優先性一元論の歴史的説明は不正確であることがわかったため、研究協力者の手を借りて最新の歴史研究を確認したところ、B. Russell や G. Moore がそれ以前の一元論的観念論を脱却して多元論的分析哲学を確立したという分析哲学の起源についてよく知られている説明は不正確であり、むしろ連続性が強調されていることがわかった。

このことは、分析哲学の方法論に関しても、それ以前の方法論との連続性があることを示唆しているため、分析哲学の方法論に関する歴史研究に着手した。その結果、明らかになったのは、分析哲学の起源は多様であり、方法論もそれに応じて相異なるため、概念分析を分析哲学の中心的方法論とみなすことは、特定の起源を中心的和とみなすことに等しいということである（この成果については、学会発表[2][6]として公表した）。

分析哲学の起源と方法論の多様性はそれ自体としては非常に興味深いものであるが、本研究にとって重要なのは、メタ形而上学における実在論的アプローチと反実在論的アプローチの対立に関してそれが持つ帰結である。そこで、反実在論的アプローチの元祖として R. Carnap 名前が挙がることに注目し、論理実証主義が分析哲学の起源としてどのような位置付けにあるかを、論理実証主義の機関紙であった当時 (1930 年代) の *Erkenntnis* 誌の論文以外の記事 (研究紹介や会議開催報告など) も含めて最新の歴史研究と照らし合わせながら調査した。その結果、分析哲学と科学哲学を明確に異なる研究伝統として理解することができることが明らかになった（この成果は、雑誌論文[1]、学会発表[4][5]として公表した）。

実在論的アプローチについては、Armstrong, Fine, Schaffer, Sider が分析哲学の様々な起源のうちどれと関わりが深いかを調査することで分類を試みた。その結果、Armstrong と Fine はイギリスや旧オーストリア (現在のチェコやポーランドを含む) の哲学者 (A. Prior や F. Brentano など) との繋がりが深く、一方 Schaffer と Sider はアメリカやドイツの哲学者 (Lewis や Quine, Carnap など) との繋がりが深いという仕方で分類可能であることが明らかになった。さらに、その背景として、イギリスと旧オーストリアの哲学にはアリストテレス研究の伝統という共通性があることと、第二次世界大戦までのアメリカでは哲学のみならず心理学や社会学も含めて、学問全体がドイツの強い影響下にあったということがわかった。このことが示唆しているのは、実在論的アプローチをオーストリア (アリストテレス) 系とドイツ (カント) 系に区別し、前者が受け入れているが後者が受け入れている暗黙の前提を除外し

た「カント的実在論」ないし「非アリストテレス的実在論」であれば、反実在論的アプローチとの衝突が回避可能となることである（この成果については、学会発表[1][3]として公表し、論文を投稿準備中である）。

このような仕方を実在論的アプローチと反実在論的アプローチを（部分的に）調停するためには、アメリカ哲学、ドイツ哲学、オーストリア哲学、イギリス哲学の相互関係を明らかにすることで「非アリストテレス的実在論」を明確化する必要があるが、これは今後の研究課題であり、本研究と比べてかなり大掛かりなプロジェクトとして実施する必要があると思われる（一部はすでに実施しており、図書[1]とその他[3]はこれに関連する研究成果である）。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 2 件）

- [1] 小山虎, 「分析哲学と科学哲学はどのように異なっているのか：二つの研究伝統を歴史研究に基づいて比較する」, 『科学哲学』(依頼論文、査読なし), 51(2), 29-25, 2018.
- [2] Tora Koyama, Against Lewisian Modal Realism from a Metaphysical Point of View, *Philosophia* (Reviewed), 45(3), 1207-1225, 2017.
<https://doi.org/10.1007/s11406-017-9824-1>

〔学会発表〕（計 12 件）

- [1] Tora Koyama, On the Plurality of Analytic Metaphysics, The Fourth Conference on Contemporary Philosophy in East Asia (CCPEA2018), August 9, 2018, Taipei (Taiwan).
- [2] 小山虎, 一元論はどのようにして現代に蘇ったのか：現代存在論とその起源の複数性, スピノザ協会第 66 回研究会（招待講演）, 2017 年 12 月 16 日, アスニー山科（京都府京都市）.
- [3] 小山虎, 論理実証主義者に抵抗したプラグマティストたち, 日本科学哲学会大会シンポジウム, 2017 年 11 月 18 日, 東京大学（東京都文京区）
- [4] 小山虎, 1930 年代の分析哲学と科学哲学, 日本科学哲学会, 大会シンポジウム 2017 年 11 月 18 日, 東京大学（東京都文京区）
- [5] 小山虎, 研究伝統として見たときの分析哲学と科学哲学の違い, 科学基礎論学会 2017 年度講演会, 2017 年 6 月 17 日, 琉球大学（沖縄県那覇市）
- [6] 小山虎, 存在論的実在論の諸相とその歴史性, 日本哲学会公募ワークショップ, 2017 年 5 月 19 日, 一橋大学（東京都国立市）.
- [7] Tora Koyama, The Domains of Quantification as Truthmakers, The Third Conference on Contemporary Philosophy in East Asia (CCPEA2016), August 20, 2016, Seoul (Korea).

〔図書〕（計 2 件）

- [1] 小山虎（編）, 『信頼を考える：リヴァイアサンから人工知能まで』（全 354 ページ）, 勁草書房, 2018 年 7 月.
- [2] デイヴィッド・ルイス（出口康夫監訳, 佐金武, 海田大輔, 小山虎, 山口尚訳）, 『世界の複数性について』（56-89, 219-251 ページを担当）, 名古屋大学出版会, 2016 年 8 月.

〔その他〕（計 3 件）

- [1] 小山虎, 「特集テーマ『科学哲学と分析哲学の歴史的関係』, 『科学哲学』, 51(2), 1-2, 2018.
- [2] 小山虎, 「第 50 回大会(2017 年)シンポジウム報告 科学哲学と分析哲学：両者の歴史的関係を再考する」, 『科学哲学』, 51(1), 89-92, 2018.
- [3] 小山虎, 「研究手帖 分析哲学とアメリカ観念論」, 『現代思想』, 46(1), 262, 2017.

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。